

巨峰茶山詩六曲屏風に初挑戦

～難しい、でも奥深い語彙に魅力～

皿海 弘雄

神辺に移り住んで四十六年、現職の時は地元の行事などにほとんど関わらず、仕事仕事で過ごして参りました。退職を機に自治会や公民館活動で地元のイベント等に出来るだけ参加するよう心がけております。

数年前、菅茶山顕彰会に入会させて頂き、昨年からは茶山ポエム絵画展示や茶山墓参の集いそして学習会等に少しずつ参加しております。菅茶山の遺徳を顕彰しようという熱心な会員の皆様の中に入れて頂き光栄に思っております。

私が菅茶山を耳にしたのは四十年程前、叔父が菅茶山の屏風の表装に出したと言って見せてもらったことぐらいで、何も分かっておりませんでした。この度、会報へ投稿の依頼に、忘れかけていたこの屏風の事を思い出し、従弟に頼んで蔵から取り敢えず半双だけ運び出し、写真に撮って帰りました。保存状態はよく七言絶句が六首書かれています。

さて、解説となると、茶山の個性ある独特の草書体が難解です。五體字類・新字源それにルーペを手に悪戦苦闘、文字はこれではないかと思っても意味が通じない。拳句の果、上副会長に相談し林多恵子さんを紹介して頂きました。早速、お伺いすると、快く引き受けて頂き六首の内四首を解説して頂きました。残り二首は黒瀬理事のアドバイスで、図書館で黄葉夕陽村舎詩集を調べましたが見つかりませんでした。六首の内、ベストを尽くして解明した五首を掲載いたします。次の挑戦に備え、皆様から忌憚のない御斧正をお願いできれば幸いです。

北郊梅林

西郊梅樹萬餘株 西郊の梅樹は萬餘の株たり

四十年前曾賞娛 四十年前^{かつ}曾て賞娛す

爾後誰分靈種去 ^{しかる}爾 後誰か分けん靈種去る

此間別作一仙區 此の間に別^なに作し一仙を画す

村はずれの梅林はどこまでも続き咲き誇っている。四十年前よく遊んだものだ。友は皆別れ別れになったがこの梅林は友を偲び世俗を離れた別世界に居るようだ

*写真 ②六曲屏風

富士

詩句無人能寫真 詩句人無く能く真を写す
畫縑誰筆解傳神 画縑誰か筆し傳神を解く
漫將高峻勞評品 將に高峻を漫し評品を勞す
不説仙姿絶比倫 仙姿は説かず比倫を絶するを

この富士の絵は見事に描かれている
誰が描いたのか神髓が伝わってくる
高く険しい山の姿はとても気高く美しい
他のどんな仙姿とも比べる事は出来ない

松竹梅

竹是為心松是操 竹是心を為し松是操なり
士林雙美歳寒姿 士林雙美歳寒姿たり
更將梅樹千春色 更に梅樹將に千春の色なるを
長部封疆芳澤滃 長部の封疆は澤滃に芳し
竹には思いやりがあり松には趣きがある
共に寒さにも耐え凜として美しい
更に梅の老木も早い春を告げ咲いている
村境の澤には霧が湧いて芳香が漂っている

歳杪即事

六十五載載將除 六十五載載將に除ならんとす
滿地氷霜夜凜如 滿地の氷霜夜凜如たり
自顧衰躬成底事 自ら顧る衰躬底事をか成さんとす
猶挑燈火讀周書 猶燈火を挑げて周書を読む

六十五才の年が今日は終わりの日だ、
どこも霜や氷に閉ざされて寒さがじわじわとこたえる。
じっくり自分の身の程を考えると、この老け衰えた体で何をしたらよからうか、それでも
燈火をかきたてて周書を読んでいる。

常盤雪行抱孤囟

潜行犯暗雪漫空 潜行闇を犯す雪は空に漫し
家國存亡在此中 家国の存亡此の中に在り
小弟啼飢兄泣凍 小弟は飢えに啼き兄は凍に泣く

誰知他日並英雄 誰か知らん他日並^{とも}に英雄なるを

暗闇を忍んで行くと、雪が空いっぱい舞っている。源氏の存亡はこの夜の、このいとけない子たちにかかわっている。小さい弟（牛若＝義経）は飢えに声をあげてなき、兄たち（乙若＝範頼・今若＝頼朝）は凍てつく寒さに泣く。やがて此の幼い兄弟達が揃って英雄になろうとは、誰が知っていたであろうか。

今回の菅茶山の漢詩の解説は、私には大変難しい挑戦でした。字が読めないし読めても前後の意味が通じない事ばかり。皆様にお知恵を拝借してここまでたどり着きましたが、改めて菅茶山が日本一と言われる所以が分かったような気がします。

まずは黄葉夕陽村舎詩集の詩の多さに驚きです。そして漢詩の一字一句に深い意味があり、その奥深さが少しだけ分かったように思います。これからも少しずつでも機会を捉えて勉強していこうと思います。皆様のご指導よろしくお願い致します。

付記 平田玉葆の後掲記事があるので、もう一首、心に響く名詩を加えたい。

田氏女玉葆晝常盤抱孤 梁川星巖

雪灑笠檐風卷袂 雪は笠檐に灑ぎ風は袂を巻き

呱呱索乳若為情 呱呱 乳を索むるは若為の情

他年鍊柺峰頭嶮 他年 鍊柺 峰頭の嶮に

叱咤三軍是此聲 三軍お叱咤するは是れ此の聲

雪は笠の底に降り注ぎ、風は袂を巻き上げる。呱呱の泣き声をあげて、お乳をもとめているが、どのような気持ちだったかの。

後年、鍊柺峰頭險（鴨越）で全軍に命令を下したのはこの（義経の）声である。